

# 耳を澄ます。



『太宰百年を送るキャンドルナイト』で灯される、NPO法人燭光の再生ロウソク

## 「寺院の公益性」に関する主な論点

それらの論議を通して、以下のような論点が浮かび上がってきています。

### ① 宗教本来の活動には公益性があるか

宗教は、社会全体に精神の安定をもたらす、また、人間の道徳・倫理の根幹を提供しているため、そもそも公益性があると、主に宗教学の分野から指摘されています。

### ② 公益的な社会活動に取り組みべきか

宗教法人は、社会と無縁ではないのだから、社会と関わる必要があるのは当然であり、また、宗教者個人が、日頃から人々の悩みや社会苦に鋭敏であればあるほど、従来の寺院の活動を越えた領域に、活動の範囲が伸びていくのは自然である

との指摘があります。その一方で、宗派本来の教義や、宗教法人の本来の活動目的である宗教の教義をひろめ、儀式行事を行い、及び信者を教化育成すること」(宗教学法第二条を歪めてまで、認知されやすい公益活動に取り組みことは、本末転倒であるとの指摘もあります。

### ③ 現状では、多くの寺院の活動は「公益」とどまっているのではないのか

檀信徒ら特定の人たちを対象に活動している寺の現状を挙げ、「特定多数の人々に対する利益＝公益」とどまっているとの指摘があります。

## 何故、今、寺院のあり方が問われているのか？

戒名問題、直葬の広がり、そして公益性の問題。こうした、寺院のあり方を根底から問うような流れは、一体何故生まれているのでしょうか？『中外日報』(平成20年3月4日社説)は、その背景を、「宗教の『公益性』が真つ向から問われるのは、それだけ宗教の社会的基盤が弱まっている証拠だろうか」と指摘しています。

## もつと社会とつながるために

地域社会ともつとつながるために、私たち僧侶は何をなすべきか。今回の特集では、そのヒントを探るべく、檀信徒のみならず地域の人々の声、「世音」に耳を澄まし、それを、そもそも「縁を結ぶ場」であった寺院において育て、積極的

私たちは、今、各々の寺院の、それぞれの立地地域における基盤やつながりが弱まっているか否かを検証する必要があるのではないのでしょうか？そして、もし弱まっているならば、もつと地域社会とつながっていく必要があるのではないのでしょうか？

にしている寺院をケーススタディします。活動に至るきっかけや経緯。成果、そして今後の課題。何より住職をはじめ、関与している方々の思いをお伝えすることが、お寺が、もつと社会とつながる契機となることを願っています。